



特263

夫永のムダルテスムテ

590

作ルエネリボア
譯 雄 辰 堀

(18) 庫文本山



始



特263
590

ルエネリボア
夫水のムダルテスマア



堀辰雄 譯
山本畫店 版



目次

アムステルダムの水夫……………1
死後の許嫁……………17
ヒルデスハイムの薔薇……………31
青い眼……………47

アムステルダムの水夫

オランダの帆船、アルクマール丸は、香料や其他の高價な物品を満載して、ジヤバから歸つてきた。

船がサザムプトンに寄港すると、水夫たちは上陸することを許された。

彼等の一人のヘンドリック・ウエルステイグは、左の肩には猿を、右の肩には鸚鵡をのせてゐた。その上、印度の織物の包を負ひ革で背負つてゐた。彼は町でそれをその動物らと一しよに賣らうと思つてゐたのである。

春のはじめ頃だつたので、早くからもう日が暮れた。ヘンドリック・ウエルステイグは瓦斯の光がわづかに照らしてゐる、霧のすこし下りた町を足輕に歩いていった。水夫はもうちきアムステルダムへ歸れることや、もう三年以上も會はない母のことや、モニケムダムで彼を待ちわびてゐる許嫁のことなどを、考

へてゐたのである。さうして彼は彼の動物と織物から得られる金を計算しながら、それらのエキゾチックな品物を賣ることの出來さうな商店を探してゐたのである。

するとアバプ・バア街の中で、一人の立派な洋服を着た紳士が彼に近づいて來た。その紳士は彼に鸚鵡の買手を探してゐるのかと訊いて、それから言つた。「この鳥は私に丁度いい、私は誰か、私がそれに答へないでも、私に話しかけてくれるものを欲しいと思つてゐたのだ。私はまったく一人暮らしなのだ。」ヘンドリック・ウエルステイグは、オランダの水夫の大部分のやうに、英語を話した。彼はその知らない男にふさはしいやうな値段を言つた。

するとその知らない男は言つた。

「ぢやあ、私と一しよに來てくれたまへ。すこし遠くの方に住んでゐるのだが。さうして君の手で、その鸚鵡を、私のうちにある籠に入れてくれたまへ。それ

にたぶん、君がその包を開けて見せてくれたら、私の好みに合ふものがあるかもしれない。」

こいつはお誂向きだと大層喜んで、ヘンドリック・ウエルステイグはその紳士に引張られて行つた。途々、彼は、これも一しよに賣つてしまひたいと思つたので、その紳士に自分の猿の自慢をした。これはごく珍しい種のもので、イギリスの氣候には一ばんよく耐へるし、自分の主人には大へんよくなじむ、さう彼は言つたのである。

けれども、すぐ、ヘンドリック・ウエルステイグは話すのを止めてしまつた。彼は彼の言葉をまつたく無駄に費してゐたからである。と言ふのは、その知らない男は彼に答へぬばかりではない。もう聞いてさへも居ないやうに思はれたのだ。

二人は並びながら黙つて道をつづけて行つた。ただ、ときどき、故郷の森を

なつかしむやうに熱帯の方を向きながら、猿が、霧を怖がつて、生れたばかりの赤ん坊の泣聲に似た小さな叫びを發したり、鸚鵡が羽ばたきをしたりしてゐた。

その知らない男が突然に口をきいたのは、それから一時間ばかり歩いた後だつた。

「もうすぐ私の家だ。」

二人は郊外へ入つて行つた。道は大きな園でふちどられたり、柵で圍はれたりしてゐた。ときどき小屋の明るい窓が、立木をよぎりながら、かがやいてゐた。さうして、遠くの、海の方からは、汽笛の不吉な叫びがときたま聞えてきた。

その知らない男は一つの柵の前に立止ると、衣袋から鍵の小束を出して門を開けた。さうしてヘンドリックが中へ這入つてしまふと、彼はそれを閉めてしま

つた。

水夫はすこし變な氣がした。彼は、庭の奥の方に、非常に恰好のいい小さな別荘を、漸つと認めることが出来たが、その閉つてゐる鐵扉は内側からすこしの光をも洩らしてはゐないのである。

この無口の知らない男といひ、この死んだやうな家といひ、すべてが彼を非常に氣味悪がらせた。だが、ヘンドリクはふと、この知らない男が一人住ひをしてゐることを思ひ出した。

「この人は變り者なんだらう。」さう彼は考へた。そしてオランダの水夫なんぞは、追劔が目的でこんな家へ引つぱり込まれるほどの金持ではないので、彼はその一瞬間の不安を寧ろ羞しいものにさへ思つたのであつた。

*
*
*

「マツチを持つてゐたら一寸つけてくれたまへ。」

さう、その知らない男は、小屋の門を閉めるため、その錠のなかへ鍵をつつこみながら言つた。

水夫は言はれる通りにした。さうして二人が家のなかへ入つてしまふと、その知らない男はランプを何處からか持つてきた。ランプはすぐ、好い趣味で飾られた客間を照らしたのである。

ヘンドリク・ウエルステイグはまつたく安心した。そして彼はこの奇妙な同伴者が自分の織物をどつさり買つて呉れるやうな期待さへも持ちはじめだした。

客間から出ていつたその知らない男は、籠を持つて、再び歸つてきた。彼は言つた。

「君の鸚鵡をこの中へ入れて呉れたまへ。私がそれを仕込んで、私の言つて貰

ひたいことをこれが言ふやうになるまでは、私はこの鳥を止り木の上へ置いてやらないのだ。」

それから、そんな中に入れられて鳥がびつくりしてゐる籠を閉めてしまふと、彼は水夫にランプを持って隣りの部屋へ行くやうにと乞うた。そこには織物をひろげるのに便利なテーブルがあるのだと言ふのである。

そこでヘンドリック・ウエルステグは自分に指定された部屋の中へ、言はれる通りに入つていつた。すると突然、彼は自分のうしろのドアが閉められて、鍵がまはされるのを聞いた。彼はとりこにされてしまつたのだ。

狼狽しながら、彼はランプを机の上に置いて、ドアを破るため、それに飛びかからうとした。そのとき一つの聲が彼を止めた。

「一足でも動くと、貴様の命はないぞ！」

顔をあげたヘンドリックは、そのとき始めて氣のついた明り窓ごしに、彼の上

へピストルが向けられてゐるを見たのである。ぎよつとして彼は立ち止まつた。 9

抵抗は不可能であつた。彼の短刀は、かういふ状況では、彼を助けることは出来なかつたし、それにピストルがあつたつて無駄だつたのである。もうすっかり彼をわが物にしてしまつた、その知らない男は、明り窓のところの壁のうしろに身をかくして、そこから水夫を監視してゐた。そしてそこから出てゐるのは、ただピストルを向けてゐる彼の手だけだつた。

その知らない男が言つた。

「おれの言ふことをよく聞いて、おれに言はれた通りにしろ。もしお前がさうしたら、おれはお前に報酬をやる。だがお前は選んではいけない。躊躇しないでおれの言ふ通りにしなければいけないのだ。でないと、おれはお前を犬のやうに殺してしまふだらう。さあ、テーブルの抽出しをあげる。……そこに五發だけ弾丸の入つた、六連發がある……それを取りあげろ。」

オランダの水夫は、ほとんど無意識に、その通りのことをした。猿は、彼の肩の上で、恐しさに叫びながら、震へてゐた。するとその知らない男は續けて言つた。

「部屋の奥にカアテンがあるだらう。それを引きはがすのだ。」

カアテンは引きはがされた。そこには床の間があつた。そしてヘンドリックは見たのであつた、そのベッドの上に、手と足を縛られて猿ぐつはをはめられた、一人の女が絶望にみちた眼で彼を見つめてゐるのを。

知らない男は更に言つた。

「その女の繩をといて、猿ぐつはをはづしてやれ。」

彼は言はれた通りのことをした。するとその若い、何とも云へずに美しい女は、明り窓のそばへ、かう叫びながら跪いた。

「ハリイ、まあ、なんてひどいやり方なの！ あなたはあたしを殺すためにこ

の別荘へ引き込んだのです。あなたはあたし達の和解の最初の時を過すためにこの別荘を借りたのだと言つてゐました。あたしはあなたを説き伏せたのだと信じました。あたしはあなたが私に罪のないことをとうとう確信したのだと思つてゐました。……ハリイ、ハリイ、あたしには罪はありません。」

「おれはおまへを信じない。」さう男は冷淡に言つた。

「ハリイ、あたしには罪はありません。」若い女はいかにも苦しさうな聲で繰り返した。

「それがおまへの最後の言葉になるだらう。おれはそれをよく記憶しておいてやる。そしておれは生涯繰り返し繰り返しそれを聞くだらう。といふのは……（そこで男の聲がすこし震へたが、すぐまた元の通りのしつかりした聲になつた。）おれはおまへをまだ愛してゐるからな。たとへ昔ほどはおまへを愛さなくなつてゐようとも。おれはお前を殺してやる。だが、それはこのおれ自身には

出来ない。おれはおまへをまだ愛してゐるからな……

さあ、水夫、おれが十まで數へてしまはないうちに、お前がこの女の頭の中へ彈丸を射ち込まなかつたら、お前はその女の足許に死骸になつてころがつてしまふのだぞ。いいか、一つ、二つ、三つ……」

さうしてその知らない男が四まで數へてしまはないうちに、ヘンドリクは、跪いたまま彼をおつと見つめてゐる女を、夢中になつて射つた。そのとき女が床の方へ顔を伏せたので、彈丸は額にあつた。と同時に、明り窓からもピストルが射たれた。それは水夫の右の頭顱にあつた。水夫はテーブルの上に倒れていつた。その間に、猿は、恐ろしさにとがつた叫びを發しながら、水夫服の中へもぐつていつた。

*
*
*

翌日、サザムプトンの郊外の一つの小屋から、異様な叫びが聞えてくるのを、通行人が聞いて、それを警官に知らせた。すぐに警官はそこへ行つて門を破壊した。

若い女と水夫の死骸が發見された。

そのとき不意に、一匹の猿が、主人の水夫服の中から飛び出してきて、警官の一人の首に飛びついた。その猿は警官たちを怖がらせた。そのため警官たちは、猿が數歩うしろへさがつたとき、再び近づいて來ない先に、それをピストルで撃ち殺してしまつた。

裁判は下された。水夫がその女を殺したあとで自殺したことは明白だつた。けれども、その出來事の事情はどれも不可解であつた。二つの死骸の身許はすぐ分つた。さうして、イギリスの貴族の妻のフィンガル夫人が、どうしてこんな寂しい田舎家の中になつた一人で、前日サザムプトンに着いた水夫と一しよ

にゐたのだらうか、と人々は不審に思つたのである。

別荘の持主も何等この裁判を明らかにさせるやうな報告を與へることは出来なかつた。小屋は出来事の八日前に借りられたのであつた。借りたのはマンチエスタアのコリンズと稱する男だつたが、その男はどうしても見つからなかつた。そのコリンズと言ふ男は眼鏡をかけて、どうも賤物らしい、長い焦茶色の鬘をつけてゐたさうである。

貴族は大いそぎでロンドンから到着した。彼は自分の妻を尊敬してゐた。そして彼の歎きを見るに堪へないくらゐだつた。彼も、世間のすべての人々と同様に、この出来事を理解できないのであつた。

彼は、この出来事以來、世間から隠遁した。彼はケンシントンの自分の家に住んで、啞の下僕と一匹の鸚鵡のほかは、誰も自分のそばへ寄せつけなかつた。さうしてその鸚鵡はたえずかう繰り返してゐたのである。

アムステルダム

「ハリイ、あたしには罪はありません。」

死後の許嫁

ヨオロッパを旅行中であつた或る若い露西亞人がカンマへ多を過ぎしに行つた。彼は、季節の間だけ外國人相手に佛蘭西語を教へてゐる、或る教師の家に下宿をした。

この教師は、五十がらみの男で、ミュスカッドと云ふ苗字であつた。彼は地味な身装をしてゐたので、もし彼がいつも蒜の臭ひをさせてゐなかつたならば、何處へ行つても彼は人目につかなかつたにちがひない。

ミュスカッド夫人は三十八から四十ぐらゐの年だつたが、どう見ても三十から三十二ぐらゐにしか見えぬ、温順しい婦人だつた、かの女は金髪で、肌は生き生きとしてゐたし、胸もすなりとしてゐた、が、その胸部と腰とはちよつと突き出てゐた。しかし、そのうちには微塵も挑發的なところはなかつた。そしてかの女は悲しげに見えるのだつた。

若い露西亞人はかの女に目をつけた。そしてかの女を綺麗だなあと思つた。

ミュスカッド夫妻はシュケエ海岸に臨んだ、小さなヴィラに住んでゐた。其處からは海の上にレランの諸島が見え、夏ならば、日の暮れ方になると、裸のしなやかな子供たちの遊び戯れる、長い沙濱が見えるのであつた。ヴィラはミモザや菖蒲や薔薇や大きなユウカリプタスなどの植わつてゐる庭をもつてゐた。

ミュスカッド家の間借人は散歩をしたり、煙草をのんだり、讀書をしたりして冬中を過ごした。彼は町に一ぱい居る可愛らしい少女たちも見なければ、美しい外國婦人たちも見なかつた。彼の目は海岸の砂の上だの、往來の地面の上だの、又は壁の上だの、いたるところにキラキラしてゐる雲母のきらめきしか見ないのだつた。そして彼の想ひは、海の方から吹いてくる風に押されるままになつて歩いてゐる間、すつかりミュスカッド夫人の上にあつた。しかしその戀は甘く、うつとりとしたものではあつたが、決して熱情的なものではなかつた。彼はそれを打明けようとはしなかつた。

ユウカリブタスは香りのよい細かい毛で地面を埋めた。それは庭の小徑をすつかり埋めて、雲母のかけらを消してしまつてゐるほど、そこには澤山落ちた。そしてミモザはいい匂のする花をひとつ残らず燃え立たせた。

或る夕方、窓をすつかり開け放した部屋のなかの薄くらがりで、ミュスカッド夫人がランプをつけてゐるのを若者は見たのであつた。かの女の動作は緩やかであつた。そしてその影繪シルエットはいかにも淑やかで、それでゐて何處か投げやりなところがあるやうに見えた。若者は思った、「もう我慢がならない。」そしてかの女に近づいて行きながら、彼は言つたのである。

「マダム・ミュスカッド、なんといふ素晴らしい苗字でせうね！ まるで呼名みたいですね。……ほんたうにこの苗字は、東洋の太陽のやうにかがやかしい毛

髪をなさつてゐる貴女にはよくお似合ひです。あの肉豆蔻ミュスカッドのなかでも一番いい匂のする實のやうにいい匂のする貴女には。……鳩がそれを囁み込んで元のまま排泄する、あのミュスカッドの實のことですよ。……いい匂のするすべてのものは貴女の匂がします。そして貴女はあらゆる氣持のいいものの持つてゐる味がするのにちがひありません。私は貴女を愛してゐます、マダム・ミュスカッド！」

ミュスカッド夫人はしかし、怒つたやうな様子もしなければ、嬉しさうな様子もせず、ただ全く無感動のやうに見えた。さうして窓から彼の方をちらりと一目見たきりで、部屋を去つて行つた。

若者は一瞬間ぼかんとしてゐた。やがて彼は笑ひ出したくなつた。それから彼はシガレットに火をつけて外へ出て行つた。

五時頃、彼は歸つてきた。さうしてヴィラの柵にミュスカッド夫妻が凭りかかつてゐるのを認めた。夫妻の方でも若者を認めると、人氣のない往來の方に二人して出てきた。ミュスカッド夫人はヴィラの柵を閉めてから、かの女の夫のそばに寄り添つた。かの女の夫が言つた。

——あなたにちよつとお話したいことがあるんですが……

——往來でですか？ 若者が訊いた。

さうして彼はミュスカッド夫人の方を見つめた。かの女は落着き拂つて、身じろぎもしないのだつた。

——さうです、往來で、とミュスカッド氏は答へた。

さうして彼は話し出した。……

「あなた、どうぞ私の話を、——いや、これはまたマダム・ミュスカッドの話でもありますから、私達の話と云ふべきでせう、——まあ、どうぞ最後までお聞きになつて下さい。

「私はいま五十三になります、そしてマダム・ミュスカッドは丁度四十になります。私ども、私と妻が、結婚いたしましたのは今から二十年前です。妻はダンスの教師の娘でした。私は孤兒でしたが、私の生活状態は世帯をもつのに必要な位の餘裕はあつたのです。私たちは戀愛結婚をいたしました。

「御覽のとほり、妻はいまだに綺麗で、ちよいと惚れ惚れいたす位でございませう。しかし、もしもその當時、これがどんな繪にだつて描いてないやうな色をした毛髪を編んで結つてゐるところを御覽になつたのでしたら！ それもみんな昔のことです、あなた、そしてこれの毛髪は、今ぢや、お誓ひしてもよろしいが、これが十七位だつたときの面影はまるで無くなつてしまひました。そ

の頃は、この毛髪と云つたら、まるで蜜のやうでした。さもなければ、それが月かそれとも太陽のどちらに似てゐるかを決めるのに、ほとほと困つたものでした。

「私は妻を熱愛しました。そして妻の方でもまた（敢へて保證しますが）私を愛してくれました。そして私たちは結婚いたしました。それは限りのない喜び、ありとあらゆる感覚の法悦、夢にも似た幸福、幻滅のない夢でした。私の仕事はますます繁昌し、私たちの夢は續きました。」

* * *

「それから数年経つと、すでにかくも一杯な私たちの幸福の盃をもつともつと一杯にすることが神様のお氣に召しました。マダム・ミュスカッドは私を可愛らしい女の子の父親にさせて呉れました。神様がその女の子を私たちに下さいま

したものですから、テオドリヌと云ふ名前をつけてやりました。マダム・ミュスカッドはその赤ん坊を自分の乳で育てたがりました、そして私はこの天使のやうなベビイの美しい乳母を愛することによつてどんなに餘計幸福になつたとてせう。あゝ、夜になつて、ランプの下で、赤ん坊に乳を飲ませてから、マダム・ミュスカッドがそいつの着物をぬがせてやるときは、何といふチャァミンダな光景だつたでせう！ 私たちの唇はその赤ん坊の、やはらかな、艶のよい、匂のする身體の上で、しばしば出會ふのでした。そして私たちの愉しい接吻は、その可愛らしいお尻だの、小さな足だの、むつくりした股だの、いたるところの上で音を立てました。そして私たちはいろんな愛稱を見つけました。小さな魔女、私の目の眸、鮑、貂、等々……

「それから最初の歩行、最初の言葉、そしてそれから、あゝ！ かの女は五つ

の時に死んでしまひました。

「私はいまだに、小さな寢臺の上に、小さな殉教者のやうに美しく死んでゐるかの女の姿が目にもちらついてなりません。私はかの女の小さな棺をはつきり覚えてゐます。私たちはかの女を奪ひ去られました。そしてあらゆる喜び、あらゆる幸福を失つてしまひました。私たちは、私たちのテオドリヌがいまほ生き續けてゐる天國にでも行かなければ、もうそれらのものを見出す譯には行かないのです。」

* * *

「かの女の死んだ日、私たちの心は急に老ひ込んでしまつたやうに感じられました。そして私たちには最早この世には何一つ面白いものがなくなりました。しかし、私たちは死なうとは思ひませんでした。私たちの生活は悲しくこそありましたが、氣持のよいくらゐ、それは靜かな生活でした。」

「どうしても私たちを離れない悲しみ、そして私たちが娘のことを話し合ふ度毎に私たちを泣かせずにはおかなかつた悲しみも次第に薄らいて行くうちに、數年が過ぎました。」

「ときどき私たちは娘のことを話し合ひました。」

「——あれが生きてゐたら十二になるんだがね、最初の聖體拜領コミュニオンの年だよ……」
「そして或る時などは私たちは焼香の絶えない墓地の中の彼女の墓のかたはらで一日中泣き暮らしました。」

「——あれが生きてゐたら今日で十五になるんだがなあ、そして多分もうとつくの昔に結婚を申込まれてゐるだらうに。」

「そんなことを言つたのは私でした、もう二年前のことです。私の妻は悲しげに微笑をしました。私たちは同じやうなことを考へてゐたのでした。翌日、私

「私たちは貼札を出しました。『獨身者に部屋をお貸し致したし。』そして私たちは大ぜいの若い方たちに部屋をお貸ししました、イギリス人を二三人、デンマアク人とルウマニア人とを一人宛……そして私たちは考へるのでした。

「——あれはもう十六になるんだよ。どうだらうね？ 私たちの間借人はあれに氣に入つてゐるだらうかしら？」

*
*
*

「それからあなたが來ました。そして私たちはときどき考へました。

「——テオドリイヌは十七になるんだよ。さうして若しまだ結婚してゐなかつたら、あれには屹度、この氣のやさしい、教育のある、すべての點であれに似つかはしい、この青年が氣に入つただらうになあ……」

「あなたは感動してゐますね、私にはそれがよく分ります。あなたはほんたうに好いお方で……」

「いや、いや、あゝ、私は間違つてゐます。あなたが今日の午後なさらうとしたことは、殆んど罪惡にも等しいことです。何故つて、本當のことを云ひますと、マダム・ミユスカッドが私にすつかり打明けてしまつたからです。あなたは、この立派な女の心をかきみだしました。私の心をかきみだしました。さうして、もうこんなことが起つてしまつた上は、あなたを私の家へお入れすることの出來ぬことぐらゐはあなた御自身でもお解りだらうと思ひます。ごらんなさい、柵は閉つてゐます、これで何もかもお仕舞ひです。もう二度と私の庭をお通り下さいませ。あなたはそれを禁斷の快樂の庭だとお考へになつた、そしてそのお考へがあなたをそこからいま追ひ出すのです。」

「あなたはもう、母親がその息子を愛するやうにあなたを愛してゐたこの女にひどく悲しい思ひをさせた、この静かな家の中へ這入らうとなさいますな。ああ、私はどんなにあなたを何時までも私の家に置いておきたかつたこととせう！　が、あなたもお解りでせうが、あなたがたとへそれを御承諾なさつても、もうそれは不可能なことです。もう何もかもお仕舞ひなのです。今夜はあなたはホテルにお泊りなさい。そしてあなたが何處へお泊りになつたかを私のところへお知らせ下さい。私はあなたの荷物をお届けいたします、さようなら、ムッシュ。さあ、おいで。マダム・ミュスカッド、日が暮れるよ。さようなら、ムッシュ、お達者で、さようなら。」

前世紀の末、ハンノウに近いヒルデスハイムにイルゼといふ一人の少女がゐた。彼女の薄いブロンドの髪はすこし金色の反射をして月光のやうな印象を與へた。彼女の身體はすらりとしてゐた。彼女の顔は明るくて愛嬌があつて、笑ふときにはそのふつくりした下顎にすばらしい闇が出来た。鼠色の眼はそんなに美しくはなかつたが、彼女の姿にはよく似合つて、小鳥のやうにたえず動いてゐた。彼女の優しさには比べるものがなかつた。彼女は、大抵のドイツ娘がさうであるやうに、家政や裁縫が非常に下手だつた。家事を終へてしまふと、彼女はピアノの前に坐つて、人魚について物語られてゐることを唄ふのだつた。でなければ彼女は本を讀むのだつた。その時の彼女は一人の女詩人を思はせた。

彼女が話すときには、馬の言葉だと言はれてゐるドイツ語も、婦人の言葉であると言はれるイタリア語よりいつそう優美になつた。それに彼女はハンノウ

のアクセント（*u*が決して*ü*の音をしなない）を持つてゐるので、彼女の會話は、實に魅惑的であつた。

ずつと前に、アメリカへ行つてゐたことのある彼女の父は、そこでイギリスの女と結婚し、それから数年の後、親ゆづりの家に住むため故郷へ歸つて來たのである。

ヒルデスハイムは、世界の中で最も美しい小都會の一つである。その町は、並はづれた屋根のある、異様な恰好の、彩られた家々とともに、まるで妖精物語から抜け出して來たやうであつた。その町役場の前の廣場の風景は、いかなる旅人も、忘れることが出来ないであらう。實に、それは、詩の額縁をつけるために描かれた一枚の繪であつた。

イルゼの兩親の住居もヒルデスハイムの多くの家のやうに非常に高かつた。ほとんど垂直である屋根は正面全體より高まつてゐた。鎧扉のない窓がそとに

向つて開かれてゐた。窓はいくつもいくつもあつた。そしてその窓と窓との間には、わづかしか空間が無いのであつた。門と梁との上には、敬虔なやゑめ顔をしてゐる像が彫刻されてあつた。それには古い獨逸語の詩か、それとも羅典語の銘かて註釋がついてゐた。對神三德、最高四德、七大罪、四福音書著者聖徒、乞食に外套を與ふる聖マルタン、聖女カテリイヌと車輪、鶴、楯形、等等がそこにあつた。それらすべては青と赤と緑と黄とで彩られてゐた。上の階が下の階よりも突き出してゐるので、家全體はさかさまの階段のやうだつた。それは多彩な、愉快な家であつたのである。

イルゼはごく小さい時分からこの住居に移つて来て、ここで大きくなつたのであつた。彼女が十八の頃には、彼女の美しいといふ評判はハンノウまで擴がり、そこからさらにベルリンにまで達してゐた。千年の薔薇の木や寺院の寶物を見るためにヒルデスハイムの美しい町を訪れる者で、「ヒルデスハイムの薔

薇」といふ綽名をつけられてゐるこの少女を讚美しに來ないものはなかつた。彼女は何度も結婚を申込まれた。しかしいつも、いま歸つて行つたばかりの求婚者の長所を賞めちぎつてゐる父に向つて、彼女は眼を落しながら答へるのであつた。自分をもつと娘でゐて自分の若さをたのしみたいのだと。すると父は言ふのであつた。

——お前は間違つてゐる。だが、お前の好きなやうにするがよい。

そして求婚者は忘れられていつた。

イルゼが散歩から戻つて來ると、家の上に浮彫にされてゐるすべての像は、彼女に、お歸りなさいと云ふかのやうに微笑むのだつた。そして、「諸罪」らは合唱しながら、彼女にかう叫ぶのだつた。

——私たちが御覽なさい、イルゼ。私たちは七大罪を象徴してゐるのです。しかし私たちが浮彫にして彩つた人たちは、私たちを恕すべからざる罪とする

ほどの悪意は、私たちには持つてゐなかつたのです。私たちを御覽なさい。私たちは怒さるべき七つの罪です。ごく軽い罪なのです。私たちはあなたを誘惑しようとは思ひません。むしろ反対です。私たちはこんなにも醜いのですから。そして「諸徳」らは、輪舞をするためのやうに手と手を取りあひながら、かう歌ふのだつた。

——リンゲル、リンゲル、ライエ（踊れ、踊れ、輪になつて踊れ。）私たちが七人の者はあなたの徳を象徴してゐるのです。だが、私たちを御覽なさい。私たちのどの一人だつて、あなたほど美しくはありません。リンゲル、リンゲル、ライエ。

*
*
*

ところが、イルゼには、ハイデルベルヒで勉強をしてゐる一人の従兄があつ

た。彼はエゴンと言つた。彼は大きくて、金髪で、肩幅が廣く、そして空想家だつた。休暇中、ドレスデンで暮してゐるうちに、この若い二人はお互に愛し合つた。彼等はその戀をラファエルの讚美すべきマドンナ・シクスチイマの畫の前で打ち明けたのであつた。その時から、イルゼはいくらか天使に似た優しい顔だちを持つやうになつた。

エゴンはイルゼとの結婚を申込んだ。しかし彼女の父は、もちろん、財産と地位とを要求した。そこで、この青年はハイデルベルヒに歸つてからは、勉強とヒルシエガツセの決闘との閑暇さへあれば、城のほとりの哲學者の道へ行つては、自分に従妹を娶らせてくれる財産を手に入れるための手段を夢みるのであつた。

*
*
*

一月の或る日曜日、彼が説教を聞きに行つたとき、牧師が、馬槽のなかの基督のところにへ訪ねて行つた東の博士たちのことを話した。牧師はマタイ傳福音書の一節を引用した。そのとき牧師は、基督のために黄金や乳香や没薬を持つて行つた博士たちの數や身分については少しも觸れなかつた。

それからと云ふもの、エゴンは東の博士たちのことを考へずにはゐられなかつた。彼は新教徒ではあつたが、カトリックの傳説に従つて、王冠をかぶつたガスパルとバルタザルとメルヒオルとの三人を想像した、それらの東の博士たちは、黒人を眞中にして彼の前を練り歩くのであつた。彼には彼等が三人とも黄金を携へてゐるごとくに思はれた。それから數日過ぎると、彼はもはやその三人を、通りすがりにあらゆるものを黄金にしてしまふ魔法使の、鍊金術師の顔たちと服裝との下でしか、見ないやうになつた。

かういふあらゆる幻覺は、從妹と自分とを結婚させてくれる、黄金を愛する

がためにのみ生じたのであつた。彼はそのために食ふことも飲むことも忘れた。恰もこの新しいマイダスは、その食物としては、ケルンの本寺がその殘骸を所持してゐることを誇りとしてゐる、あの占星家らによつて變質せられた地金以外には、何も持つてゐないかのやうであつた。

彼は圖書館を漁つて、三人の東の博士たちを問題にしてゐる、あらゆる書物を讀んだ。ヴェネラブル・ベエド、古傳説、福音書の眞正を論じた現代のあらゆる著書等。それから歩きながら、彼はその金色の空想を走らせるのであつた。

——そのすばらしい黄金の寶は、測り知れない價格になるに違ひない。そしてその寶が、分配されたとか、使用されたとか、消費されたとか、盜まれたとか、又は發見されたかと云ふやうなことは、何處にも書かれてはゐないのだ。

遂に或る晩、彼は自分が東の博士たちの寶を欲しがつてゐると云ふことを自覺した。それを發見することは彼に、戀人としての幸福のほかに、動かしがた

い名譽をも與へるであらう。

彼の奇異な振舞はやがてハイデルベルヒの教授や學生たちを氣づかはせだした。彼の仲間でないものは、彼を狂人と呼ぶのに躊躇しなかつた。彼の仲間のもは彼を辯護した。それがために決闘の果しない連続が生じたからであつた。(ネツカ河畔ではそれはいまだに物語られてゐるのである。)それからまた彼に關するさまざまな逸話が擴がつた。彼が田舎を散歩してゐるとき、或る學生が彼の後をつけていつた。そしてその學生は、エゴンが一匹の牛に近よつて行つてこんな風に話しかけてゐたと告げるのであつた。

——僕は小天使ケルビムを探してゐるのだ。それに似てゐるものは僕を感動させる。

僕は一匹の牛を見つけたぞ。小天使ケルビムは、もつとも翼のある牛なのだが。……だ

が、どうか僕に言つておくれ、草を食んでゐる美しい牛よ、……氣立のいいお前はきつとあの天使の中でも最高階級に屬する動物どもの知識の一部を保存してゐるだらう。どうか僕に言つておくれ、お前たちの種族の間ではクリスマスケルビムの慣例はすこしも續けられてゐないのか？ お前はお前の仲間の一人が馬槽のなかの幼兒をその息で温めてやつたことを名譽としてはゐないのか？ それにしてもお前はきつと知つてゐるだらう、小天使ケルビムに型どつてつくられた氣高い動物よ、お前は知つてゐるだらう、東の博士たちの寶が何處にあるのか？ 僕は、僕を神聖な財産で富ましてくれるその寶をば探してゐるのだ。ああ、返事をしておくれ、牛よ、僕の唯一の希望よ！ 僕はそれを驢馬にも聞いて見たのだが、あいつらは獸けだものに過ぎないのだ、そうしていかなる天使にも似てはゐないのだ。ああ、あいつら精力的な動物どもの知つてゐた返事といつたら、唯、しやがれた獨逸語の肯定詞だけだつたのだ。

それは丁度黄昏が終らうとする時分だった。遠くの家々の中にはランプがともされてゐた。そして村々は四方にかがやきはじめてゐた。牛はしづかに首を動かしてモオモオと唸つた。

*
*
*

ヒルデスハイムでは、イルゼはすっかり信頼して、従兄からの狂ほしい愛の手紙を受取つてゐた。彼女とその両親は、エゴンが財産をつくりかけてゐるのだと思つてゐた。

冬になつた。雪がふつた。それは見たところ白鳥のうぶ毛のやうに温かさうであつた。家々の彫刻した聖人らは、雪に掩はれながら寒さにふるへてゐるやうに見えた。クリスマスがやつて來た。そしてきらめいてゐる木のまはりて人は唄ふのだつた。

クリスマスの木は

木のなかで一番美しい木だ

なんと不思議な木よ

なんと綺麗な花の咲いてゐることよ

小さな花がきらきらしてゐる

小さな花がきらきらしてゐる

ああ きらきらしてゐる

*
*
*

小さな町の中を櫓が滑り出した結氷期の或る朝、エゴンの両親の住んでゐるドレスデンの消印のある一通の手紙が届いた。イルゼの父は眼鏡が見つからなかつたので、それをイルゼに高い聲で讀ませたのであつた。その手紙は短かつ

た。しかし悲しかつた。エゴンの父は、彼の息子が戀のために氣の狂つてしまつたことを告げるのであつた。そして彼の息子がどうしても東の博士たちの寶を欲しがつてゐることを、彼の發作が彼を餘儀なく隠れ家のなかへ閉ぢ込めさせてゐることを、それから彼が發作中たえずイルゼの名前を繰り返してゐることを告げるのであつた。

イルゼは、その手紙以來、急に衰弱していつた。頬は瘦せ、唇は青ざめ、眼はいつそう光を増した。彼女は家事や針仕事をすつかり止めてしまつた。そしてすべての時間をピアノの前で過すか、または、ぼんやりと夢見てゐるのであつた。そして二月の半頃になると、彼女も床へつかなければならなくなつた。

*
**

その同じ頃、一つの噂がヒルデスハイムの全町民を動搖させてゐた。その町

の創立のふしぎな立會人、あの千年の薔薇の木が、寒氣と老齡とのために死んでしまつたのである。本寺の裏の、閉鎖された墓地の中を匍ひまはつてゐた、その古い木が、枯れてしまつたのである。人々は心痛した。町役場では最も熟練した植木屋たちに救助を依頼した。しかし、どの植木屋も自分にはそれを蘇らせることは出来ないと言ふのであつた。遂に、ハンノウから一人の植木屋がそれを療治にやつて來た。彼は彼の技術の中で最も巧妙な手段を用ひた。すると三月の始めの或る朝、ヒルデスハイムの町中に、突然大きな歡聲が起つた。人々はみんな近づきあつてお互に祝ひ合ふのだつた。

——薔薇の木が蘇つた。ハンノウの植木屋が牛の血を巧妙に利用して、あの木に再び生を與へたのだ。

*
**

その同じ朝、イルゼの両親は、戀のために死んだ娘の棺の側で泣いてゐた。白い布で掩はれた棺が持ち運ばれていったとき、彩られた浮彫の聖人らは、雪に掩はれながら、古びた家の正面ツァイトの上に震へて、噎り泣いてゐるかのやうに見えた。

——リッゲル、リッゲル、ライエ。(踊れ、踊れ、輪になつて踊れ。)さようなら、イルゼ、永久に。さようなら、お前の徳義に適つた諸罪よ、お前より美しくはなかつたお前の諸徳よ。さようなら、イルゼ、永久に。

その葬列の前を、軍隊が通つた。太鼓と軍笛フアイテとが軽快な悲しい音楽を奏してゐた。女たちは目たたきをしながら言ふのだつた。

——傳説の薔薇の木は蘇された。それなのにヒルデスハイムの薔薇は埋められてしまふのだ。

私は老婦人たちが彼女らの少女だった時分のことを話すのを聞くのが好きだ。

「私が十二の時でした、私は南佛蘭西の或る修道院に寄宿してをりました。(と記憶のいい老婦人の一人が私に物語るのであった。)私たちは、その修道院に、世間から全く離れて、暮らしてをりました。私たちに會ひに來られたのは兩親きりて、それも一月に一週宛といふことになつてをりました。

「私たちは休暇中も、その廣い庭園と牧場と葡萄畑にとりかこまれた修道院の中で過したのでした……

「私はその幽居には入つの時から入つてをりましたが、やつと十九になつた時、結婚をするため、はじめて其處を出たやうなわけでした。私はいまだにその時のことを覚えてをります。宇宙の上に開いてあるその大きな門の闕を私が跨いだ刹那、人生の光景や、自分の呼吸してある何だかとても新しいやうな氣のする

空氣や、いままでになかつたほど輝かしく見える太陽や、それから自由が、遂に、私の咽喉をしめつけたのでした。私は息がつまりさうになつて、もしその時腕を組んでゐた父が私を支へて其處にあつたベンチへ連れて行つてくれなかつたら、私はそのままぼうと氣を失つて倒れてしまつたでせう。私はしばらくそのベンチに坐つてあるうち、やつと正氣を取戻したのでした。

*

「さて、その十二の時のことですが、私はいたつて悪戯好きな、無邪氣な少女でした。そして私の仲間もみんな私のやうでした。

「授業と遊戯と禮拜とが私たちの時間を分け合つてをりました。

「ところが、コケットリーの魔が私のゐた級クラスのうちに侵入してきたのは、丁度その時分でありました。そして私は、それがどんな策略を用ひて、私たち少女

がやがて若い娘になるのだといふことを、私たちに知らせたかを忘れたことはありません。

「その修道院の構内には誰もはひることが出来ませんでした。彌撒をお唱へになつたり、説教をなさつたり、私たちの微罪をお聴きになつたりする司祭様を除いては。その他には、三人の年老いた園丁が居りました。が、私たちに男性といふ高尚な觀念を與へるためには殆ど何の役にも立たないのでした。それから私たちの父も私たちに會ひに來ました。そして兄弟のあるものは、彼等をまゐるて超自然的なもののやうに語るのです。

「或る夕方、日の暮れようとする時分に、私たちは禮拜堂から引き上げながら、寄宿舎の方へ向つて、ぞろぞろと歩いてゐました。

「突然、遠くの方に、修道院の庭園をとりまいてゐる塀のずつと向うに、角笛の音が聞えました。私はそれをあたかも昨日の事のやうに覚えてゐます。雄々

しい、そしてメランコリックなその角笛の亂吹が、黄昏どきの深い沈黙のなかに鳴りひびいてゐる間中、どの少女の心臓も、これまでになかつたくらゐ激しく打ちました。そして木魂となつて反響しながら、遠くの方に消えていつたその角笛の亂吹は、なにやら知らず、神話めいた行列を私たちに喚び起させるのでした……

「私たちはその晩、それを夢にまで見ました……

* * *

翌日、教室からちよつと出てゐたクレマンス・ド・パムブレといふ名前の、小さなブロンズの娘が、眞青になつて歸つてきて、隣席のルイズ・ド・ブレセツクに耳打ちしました、いま薄暗い廊下でばつたり青い眼に出會つたと。そしてそれから間もなく級中クラスの者が、その青い眼の存在を知つてしまひました。

「歴史を私たちに教へてくれる修道院長の言葉も、もう私たちの耳にははひりませんでした。生徒たちは今は突拍子もない返事をしました。そしてこの學科のあんまり得意ではなかつた私自身も、フランソア一世は誰の後継者かと質問されたとき、それはシャルマフニユです、と出まかせに、自信もなく、答へました。すると私の知らないことを教へてくれることになつてゐた私の隣席の者が、彼はルイ十四世の後を繼いだのだと密告してくれました。佛蘭西の王様の年代を考へることなどより、もつと他にすべきことが私たちにはあつたのでした。私たちは青い眼のことを夢見てゐたのでした。」

* * *

「そして一週間足らずのうちに、私たちは誰もかも、その青い眼に出會ふ機会をもちました。」

「私たちはみんな眩暈をもつたのでした。それに違ひはありません。が、私たちはみんなそれを見たのでした。それはすばやく通り過ぎました、廊下の暗い蔭へ美しい空色の斑点をつくりながら。私たちはぞつとしました、が、誰一人それを尼さんたちに話さうとはしませんでした。」

「私たちはそんな恐しい眼をしてゐるのは一體誰なのか知らうとして随分頭を悩ませました。私たちのうちの誰だつたか覚えてゐませんが、或る一人のものが、それはきつと、まだ私たちの記憶の中にその泣きたくなるまでに抒情的な響が尾を曳いてゐる、あの數日前の角笛の亂吹の眞中になつて通り過ぎた獵人らの中の一人の眼にちがひないといふ意見を述べました。そしてそれにちがひないといふ事に一決いたしました。」

「私たちは皆、その獵人の一人がこの修道院の中にかくれてゐて、青い眼は彼の眼であることを認めました。私たちは、そのたつた一つの眼が片眼めついろなのだと

は思ひませんでしたし、それから古い修道院の廊下を眼が飛ぶのでもなければ、彼等の身體から抜け出してさまよふのでもないと考えました。

「そんなうちにも、私たちはその青い眼と、それが喚び起させる獵人のことばかり考へてをりました。

「とうとうしまひには、私たちはその青い眼を怖がらなくなりました。それが私たちを見つめるため、ちつとしてゐればいとさへ思ふやうになりました。そして私たちはときどき廊下の中へ唯一人で、いつのまにか私たちを魅するやうになつたその不思議な眼に出會ふために、出てゆくやうなことまでいたしました。

「やがてコケットリイの魔がさしました。私たちは誰一人として、インキだら

けの手をしてゐる時など、その青い眼に見られたがらなかつたでたらう。みんなは廊下を横ぎるときは、自分がなるだけ好く見えるやうにと出来るだけのことをしてしました。

「修道院には姿見も鏡もありませんでした。が、私たちの生れつきの機轉がすぐそれを補ひました。私たちの一人は、踊場に面してゐる硝子戸のそばを度毎に、硝子の向うに張られてゐる黒いカーテンの垂れを即製の鏡にして、そこにすばしつこく自分の姿を映し、髪を直したり、自分が綺麗かどうかをちよいと試したりするのでした。

「青い眼の物語は約二ヶ月ばかり續きました。それからだんだんそれに出會はなくなりました。そしてとうとうごく稀にしか考へなくなりましたが、それで

もときたまそれに就いて話すやうなことがありますと、やはり身顛ひしずには
ゐられませんでした。

「が、その身顛ひの中には、恐怖と、それからまたあの快樂——禁斷の事物に
ついて語るあの祕やかな快樂に似た或る物がまざつてゐたのでした。」

君たちは決してそんな青い眼の通るのを見たことなんぞはなからうね、現代
の少女諸君！

アポリネールは一八八〇年八月羅馬に生れた。母はオランダの或將軍の娘であつたが、彼はその私生兒であつた。彼は少年時代をモナコとニイスとで送つた。暫く南獨逸に遊んだこともある。それから巴里に行つて、彼は詩や小説や美術批評などを書き出した。一九一四年、彼も戦争に行つた。そこから彼は一九一六年に重傷を負ふて歸つて來た。戦地でも彼は詩を書いて、謄寫版刷りの詩集を出したりした位であつた。そして彼は一九一八年十一月に死んだ。それはしかしスハイン感冒のためであつた。

昭和十一年六月二十五日印刷
昭和十一年六月二十五日印刷

山本文庫
18

アムステルダムの水夫

定價拾錢

譯者 堀 辰 雄

刊行者 山 本 武 夫
東京市牛込區矢來町七〇

印刷者 山 田 兼 次 郎
東京市牛込區岩戸町一七

刊行所 山 本 書 店
東京市牛込區矢來町七〇
電話東京七四八六七番

青年文學者への忠言	小散文抄	地の糧抄	アリサの日記	青	ゲイテの言葉	從軍日記(カロツサ)	謝肉祭	眞珠嬢	ヴェニス物語	ソグロブ大尉のお茶	田園詩	小島の英文學	百花村物語	愛人への手紙							
ボオドレエル	ボオドレエル	三好運治	辻野久憲	山内義雄	今日出海	石中象治	片山敏彦	竹山道雄	ハウプトマン	大野俊一	モオバツサン	岸田國士	草野貞之	ケルツセ	青柳瑞穂	平井隆	戸川秋骨	佐藤春夫	湯浅芳子		
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15							
ロオレンスの手紙	ランポオ詩抄	アムステルダムの水夫	ドニイズ・花賣娘	蜜月・幸福	エビキユルの園	博物誌抄	ポオ論	戀する人々	獅子狩	ツアラトウストラ抄	病中日記	千載一週	雄鶏とアルルカン	乙女らは何を夢見るか							
織田正信	中原中也	アボリネエル	堀辰雄	堀口大樹	平田秀木	マンスフイル	草野貞之	フナ	岸田國士	ボドレエル	小林秀雄	茅野蒼々	フイリ	堀口大樹	ニ張竹風	登張竹風	中山省三	澤田三郎	平田秀木	佐藤春夫	戸川エマ
16	17	18	19	20	以下	七	上	旬	刊	行	行	行	行	行							

終

6

